

## 清涼寺蔵仏伝扉絵厨子について

高\*  
田  
詩

### 要 旨

清涼寺釈迦堂内には扉に仏伝の描かれた厨子が一基安置されている。四方開きで、扉は八面あり、絵は扉の内面に描かれている。内容は「生兜率天」から「分舍利」まで十八場面ある。「涅槃」、「金棺出現」、「金棺不動」、「荼毘」、「分舍利」の場面は十三世紀から十四世紀初頭の作例と類似していることから、それらが典拠となった可能性がある。ただ、本来吉祥草座の場面は降魔前の場面であるにも関わらず、本厨子では降魔後の場面として描かれている。ほか、初転法輪の下部の場面に象が二頭描かれ、初転法輪と後の説法とが同一の場面としてまとめられているなど特色がある。中世仏伝図の作例としての資料的価値は高い。貴重な作例として、ここに紹介するものである。

キーワード ①清涼寺 ②仏伝 ③厨子 ④仏伝図

### はじめに

本稿は、清涼寺釈迦堂内に安置されている厨子の中で仏伝図が描かれた一基の厨子（以後、仏伝扉絵厨子）を令和五年六月二十八日に調査した成果の報告である。

この仏伝扉絵厨子に関する研究は見当たらない。制作年代や清涼寺に安置された年代も不明である。

図像は、万寿寺蔵「涅槃八相図」などの作例の「涅槃」、「金棺出現」、「金棺不動」、「荼毘」、「分舍利」場面と類似する。それらの作例は十三世紀から十四世紀初頭の制作である。おそらく本厨子はこれらの作例を模範として制作したのではないか。

さらに樹木、山、岩などに狩野派の特徴的な筆法が見られないことから、本厨子の制作年代は江戸時代まで下らないだろう。これによって本厨子の制作年代はおよそ十五世紀から十七世紀初頭までと推測で

きる。

本厨子は箱屋形屋根をもち屋上に宝珠が載る。宝珠までの全高は一〇四センチである。ただしこの宝珠は後補とみられる。側面四面には四方開きの扉が全八枚付いている。扉の裏面に描かれている絵は仏伝図で、「生兜率天」の場面から始まり右回りで一周し「分舍利」の場面で終わる。扉に絵が描かれている厨子は数多く存在するが、本厨子のように仏伝図が描かれているのは極めて珍しい。法隆寺の玉虫厨子のように本生譚（ジャータカ）が描かれている作例や清涼寺旧厨子のように諸天を描く例があるが仏伝図は扉絵の主題としては稀少である。また仏伝が描かれている例は管見の限り、南北朝時代制作の大阪・施福寺蔵「舍利厨子」のみである。施福寺の舍利厨子は極めて小型である。つまり本厨子は扉絵を伴う厨子の中でも稀少な作例であり、中世仏伝扉絵としても貴重である。そこで本稿では清涼寺仏伝扉絵厨子の仏伝図を取り上げ、その図像や場面の特徴、場面の順序を考察し、この厨子に描かれた仏伝図の特色を明らかにしたい。

## 一 清涼寺仏伝扉絵厨子

仏伝扉絵厨子は現在、釈迦堂本尊に向かって左後方に安置されている。厨子は上下面が正方形で各側面に四方開きの扉が付く、全高一〇四センチ、幅及び奥行きは四八・四センチ、各側面の扉は高さ七三・八センチ、幅一五・八センチ、厚さ一・一センチ、框は高さ六・六センチ、

幅と奥行きは五〇・八センチとなっている（図1）。現在厨子の中には何も納められていないが、元来中に安置されていたと思われるのは、厨子内の広さや扉の仏伝図から推測すると釈迦像立像だったのではないだろうか。元禄一三年（一七〇〇）の『嵯峨清涼寺靈宝目録』<sup>1)</sup>には舍利についての言及があり、舍利を収めた厨子の可能性もあるが、舍利容器をいれた厨子は施福寺蔵円筒形舍利厨子ほどではなくとも概ね小型である。縦長の寸法を勘案すれば小型の釈迦如来立像ではなかったかと考えられる。ただ文政二年（一八一九）『嵯峨靈仏開帳志』<sup>2)</sup>にも本作は見当たらない。

各面全八枚の観音扉の裏側に描かれた仏伝図については次項で詳しく検討する。

## 二 清涼寺仏伝厨子扉の仏伝図

清涼寺仏伝扉絵厨子の八枚の扉には仏伝からの場面が描かれている。一部不明な絵もあるが、全体で十七から十八場面確認できる。配置については「清涼寺蔵釈迦仏伝扉絵厨子場面配置図」（図2）を参照されたい。「生兜率天」から、「下天託胎」、「誕生」、「二龍灌水」、「四門出遊」、「棄捨苦行」、「降魔」、「二商人供養」、「吉祥草座」、「初転法輪」、「二頭の象」、「涅槃」、「金棺出現」、「金棺不動」、「荼毘」、「分舍利」へと続く。以降各扉に描かれた仏伝場面の詳細を述べる。

## 正面右扉

最初の場面は正面向かって右扉上部の「生兜率天」<sup>(3)</sup>と見られる場面(図3)である。釈迦が菩薩として兜率天に生まれた場面で、菩薩は諸天に囲まれて五重の屋根を持つ建物中に坐する。建物の前には五人の天人が跪き、合掌している。この図は菩薩が閻浮提に降下する、つまり人間界に生まれ変わると決意した場面ではないかと推測する。

雲で仕切られたその下は「下天託胎」の場面(図4)と見られる。背中に宝珠を乗せた白象が雲に乗って現れているのは、摩耶夫人の見た夢である<sup>(4)</sup>。その下の建物の中の玉座に座る女性は摩耶夫人で、前に跪いている人物は占い師だろうか。摩耶夫人の夢を占った占い師は、太子は転輪聖王となるか、出家すれば仏陀となると予言する<sup>(5)</sup>。

その下方には象に乗る男性と女性の乗る人力車が表わされている。象に乗っているのは浄飯王で、人力車に乗っているのは摩耶夫人ではないかと見られる(図5)。この場面は浄飯王が摩耶夫人を妻に迎えるところではないだろうか。『釈迦の本地』<sup>(6)</sup>流布本系によれば、五十歳になっても子のない浄飯王が、占いで摩耶夫人を探し出して摩耶夫人を迎えることとなるという内容が本来の仏伝から増幅されている。鎌倉時代の仏伝図にはない内容が見られることは大いに興味をひくところである。

## 正面左扉

正面左扉の下部は、摩耶夫人が出産のために里帰りする途中でルン

ビニー園に立ち寄ったところで、樹の枝を右手で掴み、右脇から悉多太子(以下、太子)が生まれた「誕生」の場面と見られる(図6)。「根本説一切有部毘奈耶雜事」<sup>(7)</sup>には帝釈天が生まれた太子を受け取ったと記されているが、ここでは人物が両手で衣を捧げている。人物は服装から四天王の一人ではないかと見られる。その下は太子が七歩進み、足下に蓮華が開いた「七歩蓮華」の場面<sup>(8)</sup>で右手で天、左手で地を指し「天上天下唯我独尊」と宣言したところである(図7)。

山や霞で区切られた扉上部は、太子の誕生を祝して難陀・優婆難陀の二竜王が産湯を注ぐ「二龍灌水」あるいは「龍王灌水」<sup>(9)</sup>と呼ばれる場面と見られ(図7)、太子は蓮台の上に立ち右手で天を左手で地を指す。太子の上方で赤と緑の二龍王が向き合い、口から温水と冷水を吹き出して太子に注いでいる。太子の周りには四天王、帝釈天、など諸天が集まっている。

## 左面右扉

左面の右扉下部で建物内にいる人物は浄飯王と見られ(図8)、太子はさらに下方で馬車に乗り、家来に囲まれてカピラ城から外出している(図9)。馬の前には老人が立っている。建物壁の外に立つ人物は頭の毛を剃り、袈裟を纏っているので出家修行者だろう。建物の上方には棺を運ぶ人物とその隣に泣いている人物がいる。以上のほか病人も描かれているから、この場面は「四門出遊」<sup>(10)</sup>であろう。

上記に記した、浄飯王が建物内に描かれ、太子がカピラ城の外で老

人、病人、死人、出家修行者を見る様子を描く図像は、メトロポリタン美術館蔵「仏伝図」にも描かれている。浄飯王がいるカピラ城の上方には城から出る太子の姿も小さく描かれている。本作では太子は愛馬の健陟（カンタカ）に乗り、四天王、天蓋を手にした帝釈天、車匿（チャンナ）に囲まれている。全ての人物は雲に乗り、城から出てきた様子を表し、「出家」<sup>11</sup>の場面であることがわかる（図10）。

同じ扉の上部と下部とは山で区切られている。一人の天人が太子の髪を切り、その前には帝釈天が布を両手で差し出して太子の髪を受け取る<sup>12</sup>。その横には太子が自ら髪を切っている「剃髪」の場面がある。太子の前では、車匿は太子が身に付けていた装飾品を布にのせ両手で捧げている。太子の隣では弓をもった人物が自らの着物を太子の方に差し出して交換しようとしている（図11）。この場面の下には悲しむ車匿が健陟を連れてカピラ城へ帰る場面も見られる（図12）。「出家」の場面で天人が太子の髪を切るのは珍しい。

### 左面左扉

左扉の下部は、スジャータが女性に化現した天人から乳粥を受け取る場面（図13）である。霞上部の中央部分では苦行林で樹下に跌坐している太子にスジャータが乳粥を献上している（図14）。「棄捨苦行」<sup>13</sup>の場面であろう。

扉上部には、「降魔」<sup>14</sup>の場面が描かれている（図15）。菩提樹下に跌坐した太子に、悪魔達が矛や弓、剣を手にして攻めかけているが、太

子に向かって飛んできた矢や剣は折れ、太子の周りで花びらに変わっている。左下の女性達は太子を誘惑した魔王の娘ではないだろうか。

### 裏面右扉

扉の下部で釈迦（以下、釈迦）は岩の前に立ち、その下方では二人の人物が皿を持っていることから、トラブシャとパツリカが蜂蜜と砂糖キビが入った皿を献上する「二商人供養」の場面ではないだろうか。しかし釈迦は鉢を持っていなかったため、その布施を受け取ることができなかった。そこで四天王は石の鉢を釈迦に献上した。これは「四天王奉鉢」<sup>15</sup>の場面だろう（図16）。

扉上部では釈迦が岩山の前の樹下で草を敷いて座っている。ある人物が草を手にして釈迦に献上していることから、吉祥草と呼ばれる草の束を、座禅の時に敷くために草刈り人が献上する「吉祥草座」<sup>16</sup>（図17）だろう。しかし、羅摩経、僧一阿含経、四分律、五分律、根本有部律<sup>17</sup>などでは、釈迦はスジャータから乳粥を受け取り、その後瞑想する場所へと向かっている途中で草を受け取り、その草を樹下に敷いてその上で瞑想して、降魔の場面へと続く。この場面は釈迦が成道する前の場面のはずだが、この扉では成道と初転法輪の間に描かれている。このような順序が何を典拠としているのか検討が必要となる。

### 裏面左扉

扉の上部では、釈迦は樹下の六角宝壇上の蓮華に跌坐し、右手で施

無畏印、左手で与願印を結んでいる。釈迦の両側には菩薩あるいは天人らしき人物がいる。また釈迦の右手側には五比丘と思われる人物が現れている。鹿が描かれているため鹿野園を表わすとみられるから「初転法輪」の場面であると推測する(図18)。釈迦の前に座している人物達や天人、立っている比丘たちは、みな釈迦に向かって合掌し、釈迦の説法を聞いている。

扉の下部には誰も乗っていない車が二台並び、車の下方には二頭の象が描かれている(図19)。象の頭は横たわり緑色の綱を背中に載せ、その隣に立っている象は赤い綱を背中に載せている。赤い綱の象は左右で六本の牙を持つ。馬車の上方に描かれている二人の人物と下方の人物の服装や頭の飾りを比較すると、下方の人物は上の人物の家来だろう。周りに描かれている人物には様々な表現が見られる。相手を指して言い争いしているような人物や地面に顔を向けて悲しそうな様子の人物などが描かれている。仏伝に象が登場する場面に「醉象調伏」がある。提婆達多(デーヴァダッタ)がナーラーギリ(あるいは守財、護財)という凶暴な人殺しの象を使い釈迦を殺害しようとした場面だが、この絵の中には釈迦が現れないことや象が一頭でなく二頭いることから「醉象調伏」の場面ではないようである。

釈迦は「初転法輪」の後に何度か説法し、様々な身分の信者や出家して弟子となった者も増えた。釈迦の前に座している人物達は釈迦の説法を聞きに来た様々な国の王で、天人の隣に描かれているのは弟子となった比丘ではないか。下部に描かれている人物、車、象は説法を

遠くから聞きに来た王の家来や乗り物だと推測する。

### 右面右扉

右面右扉の上部には「涅槃」の場面である。沙羅双樹が宝台の四方に二本ずつ、計八本描かれている。釈迦は寝台上に横臥し、偏袒右肩で胸の部分は広く空いている。右脇を下にして右臂を屈して、手は衣で隠れているがおそらく手枕をしているだろう。寝台は左側面を見せるように描かれている。釈迦頭上の樹木には赤い衣鉢袋が結ばれている錫杖が掛かっている。釈迦の周りには様々な人物や動物達が集まって、両足を掴んでいる女性や悲しんでいる様子の人物が見られる。上部左側に摩耶夫人が阿那律や天人と共に雲に乗って釈迦の方へ向かっている様子も見られる(図20)。

涅槃図や釈迦八相図に描かれている寝台は二つの形式に別れている。第一様式は古い形式で、平安後期から室町時代まで作例が見られる。涅槃図最古の作品、平安後期の応徳三年(一〇八六)制作の和歌山金剛峯寺本を始めとする。寝台に向かって右側面を見せるように描く。第二様式は鎌倉時代に現れる。釈迦を頭の方から見た構図で、寝台に向かって左側面を見せるように描く。本厨子は鎌倉時代から現れる第二様式に属する。

第二様式の中で最も凶像が一致する作例の一つは十三世紀頃の制作とされる京都万寿寺の「涅槃変相図」である。寝台に向かって左側面を見せ、女性が釈迦の両足を掴んでいる様子や赤い衣鉢袋が結ばれた

錫杖が見られる。本厨子と同じく上部左側から摩耶夫人釈迦の方へ向かって見られる。他には十三世紀制作鹿見島龍嚴寺の「釈迦八相涅槃図」や十三世紀末から十四世紀初頭制作の広島持光寺の仏伝図にも、涅槃の構成において類似している。

扉の下部では宝台の上に置いてある金棺の中から釈迦が起き上がった合掌している。摩耶夫人と供に来た人物は金棺の前に座り、釈迦を見上げている。錫杖を持っているのは摩耶夫人で、その隣に座す比丘は阿那律と見られる。これは「金棺出現」の場面であることがわかる(図21)。この場面の構図が類似する作例は万寿寺の「涅槃変相図」である。

### 右面左扉

扉の下部には金棺を動かそうとしている八人の男が描かれている。金棺は動かさなかったが、やがて天の力で金棺を移動することができるようになる。建物の上方では棺が雲に乗っている。雲の先は建物の入り口から描かれており、天人が棺に天蓋をかざしている。建物の周りには人物はみな棺を見上げて、合掌している。天人の力で釈迦の棺を天冠寺へ移す場面と見られるため、これは「金棺不動」と推測できる(図22、23)。

扉の左上の位置では薪を高く積み重ねて、その上に棺を置いている。釈迦は棺から足を出し、大迦葉が釈迦の足元で合掌している。高く積み重ねた薪の周辺に人々が集まり、みな見上げて合掌している。

これは「荼毘」の場面である(図24)。

「荼毘」の右下には蓮華台の上に置かれている大きな壺がある。釈迦の遺骨だろう。台の下に立ち、小さな壺を持っている人物は八国の国王である。壺の右上に立っている人物は遺骨を分配するドーナバラモンと推測できることから、「分舍利」の場面であることがわかる(図25)。

本厨子の「金棺不動」、「荼毘」、「分舍利」の場面は龍嚴寺の「釈迦八相涅槃図」と万寿寺の「涅槃変相図」に最も似ている。「金棺不動」の場面で金棺を動かそうとしている人物の様子、天人が金棺を建物に移す場面も同じであり、建物の形も類似している。「荼毘」の構図も同じだが、本厨子ではほかの作例よりも高く薪を積み重ねている。本厨子に見られる「分舍利」の場面は上記に挙げた作例にも同じように描かれており、他には十三世紀半ば制作の大阪・叡福寺蔵「涅槃変相図」にも見られる。

### 三 まとめ

清涼寺仏伝図扉絵厨子は万寿寺蔵「涅槃変相図」、龍嚴寺蔵「釈迦八相涅槃図」、持光寺蔵「仏伝図」などの作例と類似していることがわかった。特に「涅槃図」、「金棺出現」、「金棺不動」、「荼毘」、「分舍利」の場面はすべて十三世紀から十四世紀初頭の作例であり、最も類似している作例は十三世紀頃の制作とされる京都万寿寺蔵「涅槃変相

図」である。

江戸時代を代表する狩野派の特徴を表す筆法が見られないため本厨子の制作年代は江戸時代まで下らない。

関根俊一氏によれば大規模な改変・修理の時期は、明治以降と考えられ、屋根や扉に認められるいわゆる白檀塗りもその時期のものである。ただ剥落部分には、当初に塗布された黒漆が確認される。制作年代や改修時を示す銘文等の手掛かりはないが、やや鈍重な屋根の形式や、当初の黒漆の状態から見て、中世末から近世初頭に製作されたものではなからうか、とされる。

つまり厨子の制作年代は、扉絵の制作年代の推定を妨げるものではなく、むしろ補強するものであることがわかった。

本稿は調査の報告としてまとめたが、多くの課題が残った。またどのような経典や思想を背景にして、制作したのかも今後の課題とした。

## 註

- 1 嵯峨清涼寺霊宝目録（二〇一三年八月二八日閲覧、<https://kokusho.nijiac.jp/biblio/100304609/1?h=fja>）
- 2 高力種信也（『泉涌寺霊宝拝見図嵯峨霊仏開帳志』、名古屋博物館、二〇〇六年）
- 3 『中阿含經 未曾有經典』（『大正新脩大藏經』（以下『大藏經』）卷一號）、四六九頁上、『根本說一切有部毘奈耶破僧事』（『大正藏』）卷二四號、一〇二頁、『起世經 闍那囉多訶』（『大正藏』）卷一二五頁下
- 4 『長阿含經 遊行經』（『大正藏』）卷三號、一六頁上、『中阿含經 未曾有經典』（『大正藏』）、卷八號四七〇頁上、『增一阿含經卷第三十七』（『大正藏』）卷三七號、七五三頁下、『根本有部律 出家事』（『大正藏』）卷二三號、一〇二〇頁下
- 5 『根本有部律 破僧事』（『大正藏』）卷二四號、一〇七頁中
- 6 辻英子（『在外日本絵巻の研究と資料』笠間書院、一九九九年）、四五頁
- 7 『根本說一切有部毘奈耶雜事』（『大正藏』）卷二四號、二九七頁下
- 8 『根本有部律 藥事』（『大正藏』）卷二四號、三三頁下、『根本有部律 破僧事』（『大正藏』）卷二四號、一〇八、『根本有部律 雜事』（『大正藏』）卷二四號、二九八頁上
- 9 前掲注5、一〇八頁
- 10 『四分律 受戒捷度』（『大正藏』）卷二二號、七七九頁下、『五分律 受戒法』（『大正藏』）卷二二號、一〇一頁上
- 11 『五分律 受戒法』（『大正藏』）卷二二號、一〇二頁上、『根本有部律 破僧事』（『大正藏』）卷二四號、一一五頁下
- 12 『五分律 受戒法』（『大正藏』）卷二二號、一〇二頁上、『根本有部律 藥事』（『大正藏』）、卷二四號、一二〇頁下、『根本有部律 破僧事』（『大正藏』）卷二四號、一一七頁中。以上では太子が他人に髪を切ってもらうことは見当たらない。自ら髪を切ったと記している。
- 13 『四分律 受戒捷度』（『大正藏』）卷二二號、七七九頁上、『根本有部律

- 薬事』(『大正蔵』)、巻二四号、三〇頁下、『根本有部律 破僧事』(『大正蔵』)、巻二四号、一一七下頁
- 14 前掲注5、一二二頁
- 15 『増一阿含經卷第二十三』(『大正蔵』) 卷二号、五八〇頁下
- 16 前掲注15、五五九頁、『四分律 受戒捷度』(『大正蔵』) 卷二二号、七八一頁上、『五分律 受戒法』(『大正蔵』) 卷二二号、一〇三頁下、『根本有部律 破僧事』(『大正蔵』) 卷二四号、二五五頁下
- 17 『中阿含經 羅摩經』(『大正蔵』) 卷一号、七七七頁下、『増一阿含經卷』(『大正蔵』) 卷二号、六七二頁下、『四分律 受戒捷度』(『大正蔵』) 卷二二号、七八一頁下、『五分律 受戒法』(『大正蔵』) 卷二二号、一〇二頁中、『根本有部律 破僧事』(『大正蔵』) 卷二四号、一二二頁上
- 18 中村元訳『ブツダ最後の旅 大バリニッパーナ経』(岩波文庫、一九九八年)、一二五―一二六頁
- 19 赤澤英二(『涅槃図の図像学―仏陀を囲む悲哀の聖と俗 千年の展開―』、中央公論美術、二〇一一年)、一〇一―一四七頁
- 20 『お釈迦さんワールド』龍谷大学龍谷ミュージアム、二〇一八年)、二六九頁
- 21 『涅槃図の名作』京都国立博物館、一九七八年)
- 22 百橋明穂『仏伝図』(『日本の美術』二六七号、至文堂、一九八八年) 六九頁
- 23 『成唯識論述記集成編卷第二 湛慧撰』(『疏第一之二』)、二九頁
- 24 前掲注18、一六六―一六八頁
- 25 前掲注18、一六五―一七三頁
- 26 『マガダ国王、ヴィデーハ国王、ヴェーサーリ国王、カピラ国王、アツラカツパ王国、コリヤ王国、ヴェータデーバに住むバラモン達、クシナーラーに住むマツラ族』
- 27 前掲注18、一七四―一八一頁
- 28 井手誠之輔『釈福寺藏 涅槃変相図』(『国華』一二六三号、国華社、二〇〇一年)、四五頁

### 【謝辞】

今回の調査と写真掲載をお許しくださった清涼寺・鶴岡光昌御住職に厚く御礼申し上げます。また本論作成にあたり、和歌山県立博物館・関根俊一館長には御高配を賜りました。指導教員の奈良大学・原口志津子教授には調査にご協力いただきお世話になりました。記して感謝申し上げます。

### 【参考文献】

- 井手誠之輔『釈福寺藏 涅槃変相図』(『国華』一二六三号、二〇〇一年)、二一―五〇頁
- 伊藤堯貫『根本説一切有部律にみられる龍について』(『現代密教第』一四号、二〇〇一年)、一六五―一九二頁
- 小山清男『涅槃図をめぐる』(『図学研究』二二号、二〇〇二年)
- 谷口耕生『清涼寺釈迦如来立像旧厨子扉絵考―金光明懺法諸天図の一遺例―』(『仏教美術論集5 機能論―つくる・つかう・つたえる』) 独立行政法人国



立文化財機構、二〇一四年）三七二―三九七頁

棚橋映水（「仏画「涅槃図」の保存修復研究―目視調査で得られた情報と仏涅槃図の図様と形式との関連性―」文化財情報学研究、七号、二〇一〇年）

森章司他「仏伝諸経典および仏伝関係諸資料のエピソード別出典要覧」（『原

始仏教聖典資料による釈尊伝の研究』中央学術研究所紀要、二〇〇〇年）

門川徹真「佛教説話の變容―醉象調伏説話について―」（『印度學佛教學研究』

一号、一九六五年）、一四六―一四七頁

京都国立博物館（『涅槃図の名作』、一九七八年）

龍谷大学龍谷ミュージアム（『お釈迦さんワールド』京都新聞、二〇一八年）

メトロポリタン美術館（二〇一三年八月二八日閲覧<https://www.metmuseum.org>）

SAT大正新脩大藏經テキストデータベース（二〇一三年〇八月二八日取得、

<https://21dzklu-tokyo.ac.jp/SAT/index.html>）

<https://21dzklu-tokyo.ac.jp/SAT/index.html>

<https://21dzklu-tokyo.ac.jp/SAT/index.html>



図1 清涼寺釈迦仏伝扉絵厨子

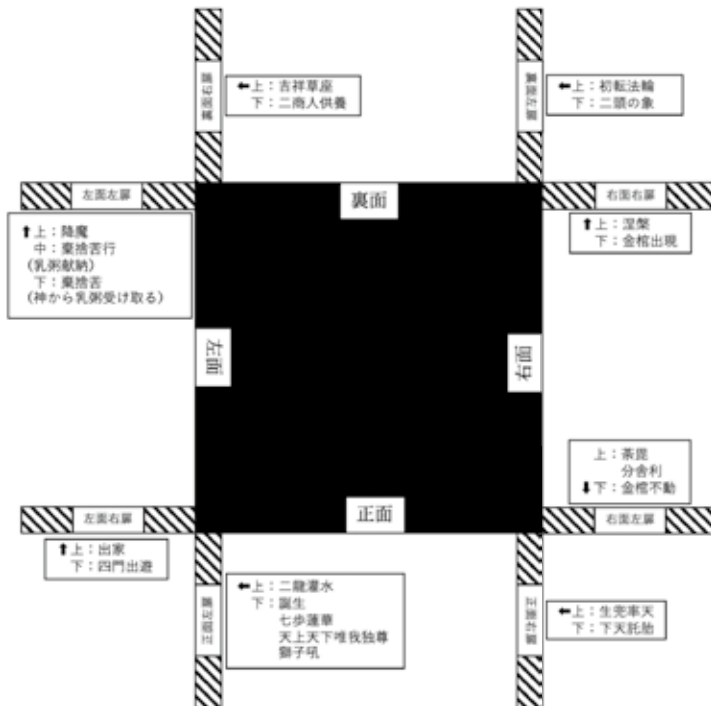


図2 清涼寺蔵釈迦仏伝扉絵厨子場面配置



図4 清涼寺釈迦仏伝扉絵厨子  
「下天託胎」正面右扉下部



図3 清涼寺釈迦仏伝扉絵厨子  
「生兜率天」正面右扉上部



図6 釈迦仏伝扉絵厨子  
「誕生」、「天上天下唯我独尊」、  
「七步蓮華」、「獅子吼」  
正面左扉上部



図5 清涼寺釈迦仏伝扉絵厨子  
「浄飯王と摩耶夫人」正面右扉下部



図8 清涼寺釈迦仏伝扉絵厨子  
「カピラ城内にいる浄飯王」左面右扉下部



図7 清涼寺釈迦仏伝扉絵厨子  
「二龍灌水」正面左扉上部



図10 清涼寺釈迦仏伝扉絵厨子  
「出家」左面右扉中部

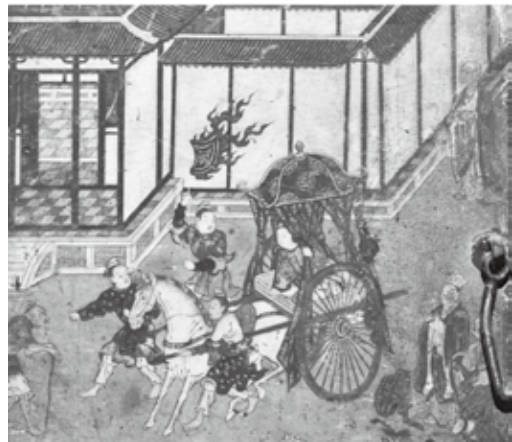


図9 清涼寺釈迦仏伝扉絵厨子  
「四門出遊」左面右扉下部



図12 清涼寺釈迦仏伝扉絵厨子  
「車匿と健陟」左面右扉上部



図11 釈迦仏伝扉絵厨子  
「剃髮」左面右扉上部



図14 清涼寺釈迦仏伝扉絵厨子  
「スジャータが太子に乳粥を献納」  
左面左扉中部

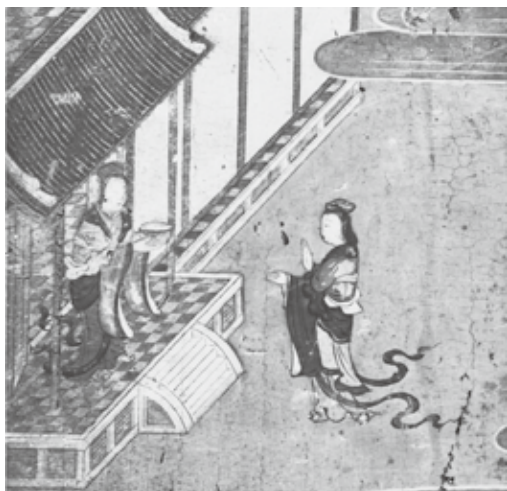


図13 清涼寺釈迦仏伝扉絵厨子  
「スジャータが天人から乳粥を受け取る」  
左面左扉下部



图16 清涼寺釈迦仏伝扉絵厨子  
「二商人供養」裏面右扉下部



图15 清涼寺釈迦仏伝扉絵厨子  
「降魔」左面左扉上部



图18 清涼寺釈迦仏伝扉絵厨子  
「初転法輪」裏面左扉上部



图17 清涼寺釈迦仏伝扉絵厨子  
「吉祥草座」裏面右扉上部



図20 清涼寺釈迦仏伝扉絵厨子  
「涅槃」右面右扉上部



図19 清涼寺釈迦仏伝扉絵厨子  
「二頭の象」裏面左扉下部



図21 清涼寺釈迦仏伝扉絵厨子  
「金棺出現」右面右扉下部



图23 清凉寺釈迦仏伝扉絵厨子  
「金棺不動」右面左扉下部



图22 清凉寺釈迦仏伝扉絵厨子  
「金棺不動」右面左扉下部



图25 清凉寺釈迦仏伝扉絵厨子  
「分舍利」右面左扉上部



图24 清凉寺釈迦仏伝扉絵厨子  
「荼毘」右面左扉上部



## Abstract

Painting of the Buddha's life on Zushi door panels from Seiryoji Temple

Aya TAKATA

The doors of a Zushi shrine located in the Shakado of Seiryuji Temple are adorned with paintings on all four sides. These doors consist of a total of eight panels, with the artwork painted on the inner surfaces. Based on the style of depicting mountains and trees, it is estimated that these paintings date back to the late 16th to early 17th centuries during the Muromachi period.

The content of the paintings narrates episodes from the life of Buddha, comprising a series of eighteen scenes depicted in a clockwise sequence, starting from his birth in the Tushita Heaven and culminating with the distribution of his relics. However, several aspects of the artwork raise intriguing questions. For example, The scene "Offering of Grass" is a pre-conquest event of "Conquest of Mara", but in this Zushi, it is depicted as a post-conquest scene, raising questions about the sequence of the paintings.

Furthermore, in the lower portion of the scene illustrating the "Setting in Motion the Wheel of the Dharma", two elephants are depicted, which does not align with the typical interpretation of the "Conquest of the Drunken Elephant". It is conceivable that the upper part of the "First Turning of the Dharma Wheel" scene relates to an earlier teaching, possibly representing the initial sermon, and is connected to later teachings. Numerous aspects of these paintings remain enigmatic, leaving ample room for further examination and analysis

**Key words** : ①Seiryoji Zushi ②Life of Buddha story painting ③Zushi

